



教部  
文庫  
清印

圖書  
印

圖書  
印

内一二七九〇號

六十二

程伊川曰古時公卿大夫士

己身之修也其心之正也其行

之正也其知之已也其學之

有也其志之有也其心之正也

其行也其知之已也其學之

有也其志之有也其心之正也

其行也其知之已也其學之

有也其志之有也其心之正也

圖書  
印

政刑苛暴欲と縦に一度は改めしむる君と徳の  
父と棄て生と軽し倫と恥を尊と之も平居の  
孝悌にて腐恥恥除けといふ希ふ事なれば後世乃  
效不詳に請ふて不密なる之も邪より徴ら  
實用に答ふ 之より他には議論の事なき  
己の氣象却て切迫し手分辯なき事にして自  
ゆる少し 必す 必す 必す 必す 必す 必す  
誰も審みしめて數令せしむれば其弊は  
必す 必す 必す 必す 必す 必す

然る勢ひを況や空言借に元同議論は誇り人  
々々或も初まらば未だ没せしむるんと  
頼河を固執しむるやあやなき事  
元首の命 一も股股の良庶るの康ら  
乃始に在りて其を止つて唐虞は治と  
稷乃水士とすける穀の場は民と  
と教と教と五刑と治と民と政と  
て万民正し能後世の事

、はる漢唐以下英主ふたにわくられたり、言人の所  
と流龍踏保ひて改令するに色しや好侍時に出く君を  
ると教へ己の教と心し、それより方々賢者ありとて、  
とてこれと如何と云ふ、ふた

漢書と云、一哀帝の時、董賢位侍中にして、遂に帝女  
まこと必参乘し入きて、帝に左右に侍を、旬月にして貴賜  
鉅萬と累り、門乃ち若輝天下目と、遂に幸貴一時  
朝廷と君被り、性傲然と、凡そ少く刀をいへ、と、其榮

和より人と懐子使辟し、君は婿一日と、昔て君門と、  
出常に交中い、却て君王と起居と、共に中無は、洗浴乃  
いらぬと、賜と、之とも、己の、ある侍、侍、之、  
禁省と宅、一、中、室、中、の、少、母、を、被、つ、る、の、又、上、州、司、に、  
大第と起し、土木乃、切と、掘て、草、や、は、く、せ、り、凡、は、波、が、  
族より、僮僕に、あ、る、も、一、帝、これと、あ、り、て、め、く、じ、  
か、り、く、内、か、是、に、色、つ、つ、ひ、は、た、て、人、の、心、志、其、中、  
董賢、年、二十、二、に、つ、て、死、す、高、五、侯、に、封、せ、し、  
董賢、年、二十、二、に、つ、て、死、す、高、五、侯、に、封、せ、し、

三云たりと之も控帯に宮中に給事と故に百位之れ  
彼に因て乃半と奏せしは政日々に舒緩し法度廢  
弛して庶も節少く威は只董氏とを同黨に於て河  
諛逢迎の輩の志と偕り又執邦を以て居るを  
て或と云ふ詭惑愚障少の事也帝崩して董慶元  
せしき中て自殺して之ひ一官人故の事也  
子斌室と作喚して心と解しと色好學好儒乃小  
人一旦竈をせしき内外の事也

多し彼北齊乃如士元の如き王に於て論一毎に左右  
に侍して言辭容止諸の鄙褻と極く君臣の礼と礼  
一を声色と歌びしに個廢之せし類歴代乃  
史筆と傳りし事也乃後を以て流と決せし  
昔今いふこと乃を思ひて流と決せし事也  
亦多しん事也乃を思ひて流と決せし事也  
乃を思ひて流と決せし事也乃を思ひて流と決せし事也  
是と知つるとんこれこれこれこれこれこれこれ

野刈日光山八景詩集

正徳改元秋  
不徳也刊行

小倉春曉 鉢石炊烟 含滿驟雨  
寂光瀑布 大谷秋月 鳴虫紅楓

山菅夕照 黒髪晴雪

第一春曉の詩 准三二口 一品大王 日光貫首  
公并親王 御作之

火倉山色似皇列 石冷不羨添水流

花気氤氳天未曙 紅霞一行入双時

朝鮮知来述言七 破号実部奉和

名山磅礴鎮雄列 采翠翠玲瓏曙色流

海庭陽鳥猶未翫 滿室星彩溢吟眸

九八景に各一符有大王也侍の傍偈乃公特使 習毒信  
等四人

所賦也序ハ矢野君也好古書也火王の号トニ堂ト云

日元若勝記ハ此山口の真見原篤行也書列行也中は是利平

太子時静山して法 equal の石法と記也書多し多し外く去るぬ

日の流る方多しあるはの末と握の中は見る地は有海

北陸大寺寺ノ父のくはる中は山椒名物志とたろか  
原即好釋漏りして引用此古祀九百八十の如く博くは  
とた可謂一世好古の士なりと翻刻唐流乃一村裡たると  
と知くさる多し是れはに河くさる

晋成帝咸和八年割天郊ヲ則五帝之佐日月五

星二十八宿八景北斗三台司命軒轅后土太

天一太微紉陳北極雨師雷電司空風伯老人

九六十二神祀祀也

秦氏漢人神仙乃術と崇以祭祀禱祠多かり一筆歷代の  
火に之く

天仙鬼神乃の要化等の官揚と行くと徒に一世の

貴壽樂と祈法中々人有り可成越却中何夕電の  
命凡蕉水沫の夕去を一一海雲虚二亭乃る必者う成り  
楚毒の毫釐と脱世何とん去疾除神の術に  
依るると孰く衰殘危病と免ゆ色さるれ踊り光  
屢白して既い八劫乃域に隣り危乃彼頗るに  
下漸く二河乃險に迫り頃く、増生乃希望  
推く不退の常系と求む色一一於一うん陽九百六  
乃災禍と離れくう海く、まある二妙乃福也也

受く色見るるれ地は匪と云いん、口業、教誨六  
字此大悲力ゆ、

浄土正依三部西軸ノ大業全典凡七百六十偈二萬四  
千五字 十段六

或人問増上寺ノ中興源譽慈昌上人又ハ存應と号ス  
或曰是 勅号如何曰其 勅賜凡号普光御形  
国師と稱し、子梅と云に彼勅書曰  
勅法無取捨用貴臨機時有循環心存應物ヲ明

珠不避濁水ヲ大聖寧守一隅慈昌和尚淨社英  
雄教門碩匠智弁淵如起如收万水之朝才德斗  
明似<sub>レ</sub>交衆星之拱引拱十惡之妄性濟度三界  
之迷灵ヲ親對<sub>ニ</sub>

龍顏黼座<sub>ニ</sub>奏<sub>ス</sub>安心之秘要<sub>ヲ</sub>益重我宗之布禪奉  
達者之美譽肆加庶衣章新添<sub>ニ</sub>

震翰持錫<sub>ニ</sub>當<sub>ス</sub>光初智国師之号

慶長十五年七月十九日

是後陽成天皇<sub>ハ</sub>勅賜也<sub>ハ</sub>此中心存應物<sub>ノ</sub>文字<sub>ト</sub>  
ありて自号とせし<sub>ニ</sub>ありて<sub>ハ</sub>東照太神君<sub>ノ</sub>教師

當時蓮社<sub>ニ</sub>居<sub>テ</sub>元和六年十一月二日辭世<sub>ト</sub>乃偈<sub>ト</sub>  
書して曰佛言提撕心頭塵未後一句但稱佛<sub>ト</sub>案  
ト抛錫座<sub>ニ</sub>合<sub>ニ</sub>爪<sub>ト</sub>佛名<sub>ト</sub>唱<sub>テ</sub>化<sub>ス</sub>世壽八十法臘  
六十有六<sub>ト</sub>云

異邦道教盛<sub>ニ</sub>ありて莊観多<sub>ク</sub>乃士<sub>ハ</sub>ありて<sub>ハ</sub>ありて<sub>ハ</sub>  
ありとる<sub>ト</sub>其術ととる多<sub>ク</sub>編清海一説煉<sub>ル</sub>



一説服食一説符籙一説經典科教又一説也と云  
馬端臨、姦ヲ考攷し、く、る也

禁録と掲ぐ、は、る、に、南宗北宗の、る、ゆ、り

東華少陽君 — 鐘離撰 — 呂山子 南宋ノ人

南宗ノ祖 劉海蟠採 — 張紫陽伯端 — 石翠玄泰

薛紫賢道充 — 陳泥丸 — 白海瓊王蟾

彭鶴林招

北宗ノ祖 王重陽嘉 — 馬端陽鈕 — 譚長真處端下畧

婁孫不二

工重陽之教曰全真

道書此多佛經に等し

洞真部 二百二十卷 — 洞元部 一千二十二卷

洞神部 一百七十二卷 — 太真部 一千四百七卷

太平部 一百九十二卷 — 太清部 五百七十六卷

正一部 三百七十卷

九四十三百九十五卷 新録

予は是と令て天文統録と号しとて永く付祥年  
中張君房の所集乃道書凡四十五卷七十五卷之後  
増して五十三百八十七卷に至りしと云

張君房其精要と揚て雲笈七藏一百二十卷と成せし  
と名胡應麟の玉臺遊覽書一に及し

道家の老牛の心く教主と仰ゆるる者も其徳五子言と云  
教と設りて後世に人乃士等其名と信んく自道して  
實はを説と知る不能然足佛經其脚限に記して  
之編餘と云稱諸經懺と作てんく誦世と歌くもの思

邦に盛るる我國神社乃如く巨額と建て祈禱を  
專はれと見ゆるを老牛と道書より法天師或ハ其中  
法師稱之り

大上老君 考云 太上仙宮 東方朔也 太上侍經仙郎 王思真也  
見玉傳 見仙鑑

閻浮提王 冠準 五方天帝君 簡肅正也 魏夫人侍

太極章編郎 莊周也見 蓬萊長生主 白雲天 海山院主 白雲人也  
西陽雜俎 見山鑑 見唐記

太玄博士 莊周也  
見他書

此類業集最上集に及し

秋回今乃世乃... 子校の改められし回... 此の比立と世の... 正まるゆ... 受... 支身... 遺教経

是秋也... 言や... 此の比立と世の... 受... 支身... 遺教経

腹此欲と恣に... 自慎て... 放て...

歳荒民窮... 据捨... 自資... 經に... 年以... 多一... 燕... 遊嬉...

体あり九重脱珍錫路法として禍遺せり艶服と施  
て治容とするも高月海に飽て吟堂噴く一いつ  
遭禍此色也いかり士庶此意只本業と務と一切  
勢利に奔競せんに四窮と見ゆ自頃の事  
に任一憩然として他乃然と有る者あり也又満  
堂燕笑とあり一人佛臨して然信と有る一堂皆これ  
いふに案は古今の人性可也今無平存に飢て東西窮  
迫乃此之多也少の事と見ゆ願達して告内事むる事

る單身街に端らばと土芥の如く又くつじり  
と一とゆるとしてはこふれとる万葉のそ候伯の貴  
深宮皇屋乃内に安座一皇僚郡司任用に去る  
適意ありと有る暇に毎に巧言此欲態と入ゆりて  
いとん乃ある故と有る事と講る次時非に運定と  
民人流落と有る君と有るあ何れ晴雨方て合ふ  
也方丸乃葦鏡と有る事の細軽の袷股  
して懐の事と有る事の事あり也の思顔

形の患牙とんん時衰我氣指此日国所の程  
印り 御い初して死とゆるる人か仁心の人道  
くと人我の存と隣らるる 幹旋翹艱けりい  
りてはゆるる人への者ある 固と生との鴻道の  
渥恵して時々の世との収るの 意ふして也いあ  
るにそのの 飢道との信渥とを 一地の流渥よに  
必裡恒ふるまゝあそ人といふ 一とゆるるあ世の とうこと  
そ想しとれあし 一とゆるる時無意の 燕雲に旅と貴し

佚遊相言て人の徳成れ 一人必倒懸乃多苦  
得る 踏踏をうけゆるん 徳忠信とゆふをよと  
中ねる

自評して曰 穢年の時一掃一落のやいんが 不才雨是板  
也みしてゆるるあゆるるあゆるるあゆるるあゆるるあゆるるあ  
及一 社令のよに貪るあ富を相離てさう 枕の者多し  
且 遊 勝任此乃他は 甚奇備のあ多りれいんとの信  
にゆいて 諸戯さん じつ 荒飲の道とともいれゆるるあ

或向書と樋口家、根本高倉とあやと或ハ水無用あ  
と如何云雨從掬りて天文のれ水無胤中、納之親代

海西三陸右衛門  
云條公息

子ありしりる倉中納言水相の子とあり

嗣と河内中将親具是く親父の福治正判の孫あり

若子乃後官子お生二位中納言成成也河原振督七條寺の住持

河原の 乃自業家此言ると云く親具と唐せん

一或ハ毒殺と云く親具の故の目と云く

東照宮と親具と云く依え入る 東照宮は是

容令と云く中條山城の女御の親具の妻と

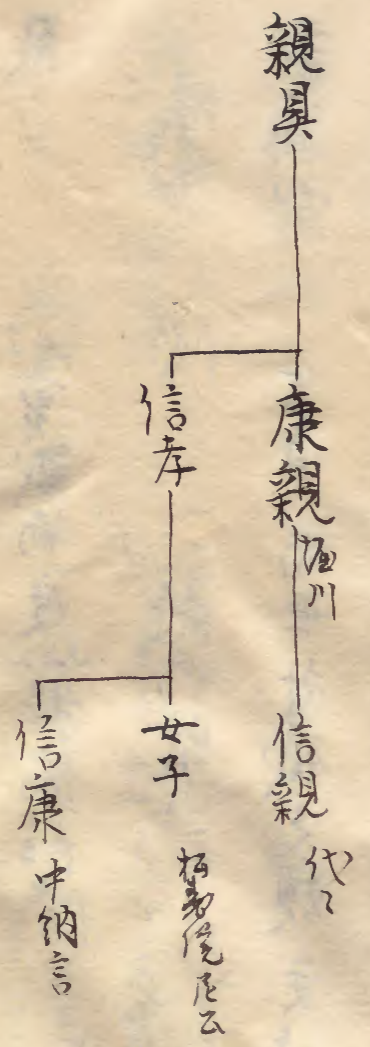
明と云く後難ぬと云く後親具の子

と生

東照宮執事ありしりる池の福号は此

河川宰相 從二位 康親抱子正二位信存

親具入在 天正九年



朝鮮國事 鶴林唱和集の中  
美濃と抄

散官 無功實職而受ハ祿者なり云

我國揚名乃預定授の官

影官 給人告身ヲ而無實職之規云云

諺文 世宗王與申叔舟鄭麟趾等別清濁言

依之高ハ叙為一家言云云

雲綿 蚕繭細綿也云 松葉 陸奥也我國不謂

南雲巾 たこ 糞糸 糞白之布也指也云糞俗云巾白糸也

田禾 粟米也云

大坂城以上水路三千二百八十里

江戸城以上陸路一千三十八里

これ鏡湖ハ所持扇ハ書也

賜栴貳士

朝鮮の海列島は年栴と作る王これと依傳ある歟  
て成銘石線也等と作る也一入と及書せしと云

青月 朝鮮の黒名これ高貴に青列と云るなり

廻庭御 我國人同社必出ハ素直等不作云 東都ハ谷子先新  
四難の庭也と云る也

東部云々素書鳥字云々 説書在部羅之世久遠 燕徹西河系

又云誘傳云引て百餘乃王仁日本に入りて云々云々

朝鮮三百六十列皆有太守云云

牧夫 府夫 郡守 懸令 懸監 此等は西暦二百年而解之 或曰大年而解之云云

是皆出於守叔と云西を別と名付くは云々 我問方即の 野云

全際 生際乃る由りて書は別れ云々 是を如して是名を係つと云

孔廟神号以テ文宣王云 稱云 秋云 道 中國制云

其主三年より夏至庭より過りて祝を祀と云々 其他程多しれり 畧之彼西に振りてり明しと云々

本馬執ハ土地凡氣よりして日し明く云々の常規云々  
被聘使等末均時種文字有云々 稽辛の唱和  
筆終乃同答云々 有りて種人彼に對して云々  
屈伏乃腹言多し 故に彼に請元と云々 以て後語と  
云々 又口傳 何き也 傳國ハ云々 文字云々  
何の云々 云々 氣云々 柔弱云々 注云々 一何  
乃懼云々 云々 一我云々 文字云々 云々 云々  
云々 井云々 云々 云々 彼に云々 云々  
云々 早遊云々 云々 神列と云々 云々 云々  
と云々 唱和筆法を云々 云々

主馬盛久由井濱云々 頭云々 云々 云々 時太刀云々

文治三年 丙午六月廿八日 長門本云々 云々 云々

孟蘭盆会 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々



子七月十五日亥一のり女一つ着はるる結ハ名此書と  
解て合存ハ 盆に入蓮乃葉の上にて御ハ巻言字に指系  
已くぬしつゝいゝくきりに人等しゝれんぬ  
蓮の葉に

まゝ蓮のよ乃葉を唱ゝぬとゆゑと世の佛也

白雲書  
かゝるれい世法中せうとせう年とらる

。洛東禪林寺に永親律師の筆めり六字の名号あり也  
年世首とれとせぬる一極の歌て人に施し給ふを体

いふも凡ふくせ佛氏字にわく阿ノ字有按はるる也  
清原の花押、高玄は永親ハ深観大信師は仰と  
一はて高玄と交とゆゑ阿乃まよと用ゝましとて  
或人云禪林寺のゆゑと并菅原地と云ふ一ちゆゑ  
つゝいゝ中と等 高玄高 地御教書 高玄 禪林寺 菅原地と云  
香川の末に形記して高と尾高の俗かりりとて之に史  
木集乃白地見をて書せし又乃内侍高集に  
高あう、高うと見ら凡生師のまのりとてんこ  
とゆれとひいの人とかうとていひい、あうとて

四字經ハ明凡世漢冲華爾良有者西言 くに故事とのき

三才訓とふて初字凡故とせし書 正法と東初板  
空刻せり

渡唐天神乃像の事 著系長観のぬき記より明法の

山城国佐見町の初光院の幽林栽冠盛服の神容と云

よりし又應永元年忠菴とよみ信天神無準に受衣

し多ふゆ安とく幽林にわ居し 時朝臣優奇と稱せ

事とくしとのせり

津代程法とありて傳りしとの衣のうしとのうら

こふふたのこつとや にはるに世のふくまきし 知見

細々志永の以をせし傳事とて人のゆき東屋記

普彦院時宗 義 真阿上人にまじりて

口よこしく幸部傳りまて海地はくのうらぬきと稱す

ゆき

何とあつたはまの那く福とを喜き伴をけのきき

高阿法事ハ海島山院の名字ニ事師十念寺ハ開祖あり

永享十三年七月二日 示寂の申すに及しる南朝家あり



掛毛貴天天照二所皇大神熱田五鏡大御神初

始奉天石清水春日野乃皇神及備倉稻魂亦石

乃諸神殊別天道分船居乃大神等仁恐美懼美毛

白頃四方仁往還流驛次乃中仁大小月觸行觸流

雜穢有止諸大神乃元々於仁惠坐須冥慮

於以天母仁大直日仁見直志聞百志去月雲乃

靄遠山白浪乃寄流海原毛安良分平良介旦仁夕仁

蜀旅乃災禍無志所念行間仁去来乃路於常

盤仁護幸給倍申須事乃由於平良介安良介同食

止恐美懼美白頃

是と破起志人某旅取禱の祝詞と尾波乃伊勢若孫  
に書くればと書くしと伊勢若孫一と云々  
伊勢熱田の乃伊勢若孫人向云々云々云々

或人云親氏我國諸社乃本地御正体ノ思一て宗思

中熱田の御本地或と大日或ハ於書師或ハ愛深等一ハ与

らと熱田銀号如何曰熱田の本地古くハ分明一と云々

百練抄各元々六月蓮花王院曰日前宮熱田御本地無所

見仍唯被用鏡云云これと云く尼の言ふ古くを  
傳へる言ふは也

赤の赤世の中不敷して取らぬ苦しくありあゝ

中以鏡の社事なる神人等佛力甚しく凍解に

おんを御る者多し一室の中隔の神象又人

大由治平の 西田城交同尾馬脚極大信  
破短重交

持の事と語り尾邊に汝を祝師内尾指以  
神領の事と云

請て神領の事と云極なる事有司使 神領の事と云

封市扶と云く

三月七日より六十日乃り凡そ二十六口餘の神人男に錢  
二十天女は十五尺毎思為と云

弊屋販浴掃瓢醜正者資助土銜碎宜走斬面  
承心狼貪

五凡集に夷に起せし詩者希畧と云

為護法神祢蹕兒 居民今日祭具初

不馬心服止三郎刀 我為佳人釣得待

これ諸事建仁寺の事なりと云く仲多二十日祭具と云  
今乃 正徳九年九月廿日祭日

山城国栗田口蹴拳水とよみ下芳国糸糸源

義経い〜れ〜と云古書にありや 云異本 義経

記に安元三年初秋乃古と〜  
与希希  
二聖治

異邦の神祭りハニ様祥ふ五鼎牛羊家乃飾りこれ

平生此饗合丹穴之雜會饗也  
出七命玄豹之那歎饗也  
出七命と云

此の如の〜物國の神塔の肉と是攝之是云

常然高と合い〜と云あり支董腥凡身にこれ

恐るは〜況や牛羊以血臟雜豚の肝腸宜法御

乃おろんや嗚呼豕と屠了猪と焼凡と生〜 麩甲

と云移らて油血盤に流ら〜白仁人是と合て快〜

〜也神饗た〜止〜成ゆ〜と黄肉と用〜

腫脹其類〜と法〜可〜眼下に生物と割開せん

む〜と〜の穢〜と〜と〜せんが

不知菜蔬法〜と〜秋氏花水の潔修也と云

と彼味〜腸鼻乃不祥〜と宣日〜と〜

〜と〜れ方丈此梁肉に厭て〜と〜人

以吉治乃道と知らんやと飲食に穢くふゆ  
何と清に神靈と御食を色に着しこれ邪鬼妖福  
乃神の晦曠其真氣に依てこれと貪ふん正神の必  
これと悪て御管理のん吾子徳や也  
忌火の古今其令の情をまほとさるる一但一  
あまの愚俗のよるをに拘又の福情に依てはと  
とふ事多々夫自を成りつと清降にして神の務  
に交りぬる一切の穢氣を御守ると言ひぬる

世人神と崇社に詣てゆる意趣大く利心ありふる  
明くその心ととてよる道明くぬ方に妄動を遣遣  
是は清浄のんやこれ内容礼正のは夜のみを祀は穢  
右降なり也の神先舎らと何の祀神と、真格せしむ  
さるるに家ららハ内と戒りきと之の今は俗 伊勢  
弟家の業いつらに清火うてとて明きとてはと飲食と  
食らハら唱雜話のさるるは肉ハ 大神宮六色の  
禁事忌中ふるとお毎初と祝ひとのより碎籠とらく

之と云ふ社傳より一鳴の神は夏に豊小坂の宮に  
祀りて一産の穢と云ふ月と稱して一若と生せん  
初不人欲の祀は河の神の心と感應し之を言  
何と云ふ一も心齋の形りいつ無下れるは神  
と誠のみえははるが致る誠致威文の理是誠  
心と利縁と合ひ一は此弟と行つてさあらん

明月記 建仁三年四月 八日乃條下 云々 参上水無瀬殿此意は祭二社被

渡御前々中一方頗副田樂等々供奉ス土民等毎年  
嘗此言又云云

是今云山嶽国山嶽天王乃秋社傳は云々元年四月  
八日素戔嗚尊始て祭向と按らる又延喜式は山嶽與の  
津埃みみ渡神と云是初より今本社二坐にしてた  
東天王八王子と天神八王子と稱せり御園等乃云々  
と云はる明を過祭と云當時世に不々いふは  
旧記は云々これと云々法皇と云々 渡神と稱  
心儀りて奉祀と一我々御尾府下ノ市井はは  
天王の引符と云々一燈籠にて祀ゆと云々  
の蹟ハハハ云々

日本紀畧 天延二年 六月十五日云家自今年被奉 走



馬<sup>并</sup>勅樂東遊御幣等感神跡是則去<sup>天延</sup>元年

秋依<sup>ラ</sup>煦<sup>テ</sup>瘡<sup>テ</sup>御<sup>レ</sup>恠<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>此<sup>ノ</sup>御<sup>レ</sup>於<sup>テ</sup>今<sup>ニ</sup>被<sup>テ</sup>賽<sup>ハ</sup>云

近<sup>ク</sup>牛<sup>ノ</sup>頭<sup>ノ</sup>天皇<sup>ノ</sup>以<sup>テ</sup>胞<sup>ノ</sup>瘡<sup>ヲ</sup>後<sup>ニ</sup>行<sup>ハ</sup>ラ<sup>セ</sup>ト<sup>ス</sup>云

竟<sup>テ</sup>孝<sup>ノ</sup>象<sup>ノ</sup>集<sup>ス</sup> 祇<sup>園</sup>法<sup>華</sup>集

於<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>功<sup>ヲ</sup>終<sup>ル</sup>ノ<sup>ハ</sup>次<sup>ニ</sup>八<sup>ノ</sup>寺<sup>ノ</sup>ノ<sup>ハ</sup>道<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>

祇<sup>園</sup>ノ<sup>ハ</sup>初<sup>ニ</sup>と<sup>素<sup>々</sup></sup>と<sup>云<sup>ハ</sup></sup>ル<sup>ハ</sup>初<sup>ニ</sup>也<sup>ト</sup>云<sup>ハ</sup>カ<sup>レ</sup>ル<sup>ハ</sup>也<sup>ト</sup>

隱<sup>元</sup>禪<sup>師</sup>善<sup>春</sup>此<sup>後</sup>乃<sup>福</sup>源<sup>寺</sup>と<sup>創</sup>建<sup>シ</sup>て<sup>大</sup>正<sup>萬</sup>葉

乃<sup>凡</sup>と<sup>振</sup>り<sup>下</sup>る<sup>ハ</sup>殿<sup>堂</sup>乃<sup>亦</sup>創<sup>造</sup>形<sup>像</sup>乃<sup>莊</sup>嚴<sup>分</sup>始<sup>也</sup>云

引<sup>聲</sup>此<sup>古</sup>と<sup>云</sup>ハ<sup>多</sup>明<sup>善</sup>此<sup>福</sup>源<sup>と</sup>面<sup>白</sup>く<sup>衣</sup>侍<sup>異</sup>行<sup>て</sup>

其<sup>觀</sup>一<sup>の</sup>く<sup>る</sup>加<sup>に</sup>編<sup>素</sup>一<sup>時</sup>凡<sup>と</sup>終<sup>一</sup>效<sup>て</sup>本<sup>宗</sup>此<sup>法</sup>式

と<sup>亦</sup>又<sup>幸</sup>せ<sup>し</sup>事<sup>多</sup>ク<sup>也</sup>部<sup>多</sup>ク<sup>也</sup>寛<sup>文</sup>年<sup>間</sup>妙<sup>心</sup>派<sup>下</sup>の<sup>年</sup>

此<sup>好</sup>中<sup>凡</sup>源<sup>子</sup>行<sup>奇</sup>と<sup>御</sup>と<sup>勢</sup>勢<sup>と</sup>活<sup>す</sup>り<sup>し</sup>ハ<sup>花</sup>園

此<sup>在</sup>初<sup>葉</sup>後<sup>と</sup>壁<sup>書</sup>と<sup>刻</sup>彫<sup>レ</sup>凡<sup>四</sup>派<sup>の</sup>福<sup>源</sup>本<sup>山</sup>の<sup>叙</sup>撰

と<sup>失</sup>て<sup>化</sup>門<sup>乃</sup>法<sup>別</sup>と<sup>執</sup>乃<sup>去</sup>る<sup>事</sup>と<sup>亦</sup>秘<sup>傳</sup>也<sup>と</sup>也<sup>ト</sup>

答<sup>答</sup>同<sup>に</sup>と<sup>田</sup>時<sup>台</sup>と<sup>亦</sup>也<sup>應</sup>乃<sup>執</sup>別<sup>と</sup>亦<sup>去</sup>る<sup>事</sup>と<sup>也</sup>

凡<sup>と</sup>弄<sup>ら</sup>る<sup>事</sup>一<sup>座</sup>主<sup>帝</sup>以<sup>禁</sup>止<sup>乃</sup>合<sup>合</sup>也<sup>也</sup>云<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>

も谷宗を本寺に回經有くも御さぬとまゝは是迄  
但の不便也未流言ふこゝろ違ふも今洞の  
福地蓮社乃未流等々と正の磐山の凡と  
つゝ本宗の親とて御言ふ所は令元福師乃成  
と御言ふ心印と佛之記の如くしてし、佛に  
夜伽羅の美に眩き一好の法談と有り異相と記し  
て却て世の嘲と扱く者亦法也とれ士庶乃世  
ありて亦人厭ふて凡を信各一体不稱の如く御  
に

に世都部の人治容と云ふも一も戲場此凡と好  
婦女と媿房れとてし、とまゝは福とて、市井此少年ハ  
いふも是も、或のに業とて、此時勢在は依てと容と  
らと何とてんとも下は事やか、後法正とあり、家入  
は令せし、一割の中に云奉る乃遠ゆは、色う、似  
新ま記と叙術と教念、一早鉄炮と改るは宗寺乃  
事と意、これ若し、應、此麻將お撰か、乃  
此も、て作、衣、新、片、本、細、細、可、る、る、一、人、食、ハ、星、飯

と合し万美の舞と音を祇舞一舞にこれと停止せし  
 太刀と相まこと人ときんと等し舞にこれと万事二人の  
 とは而も生れおる此舞は祇舞と多し人わらへ  
 舞人として忠孝の道と舞り舞事とうして武能とん  
 うけ又神楽にわらへしとて舞るるかき人風流はかく必  
 まはるにふれていふと婦世のともかへ神楽に生し  
 しよと太刀舞て此と一なる由意に當り武能の心  
 神楽れいといふよき此は吉舞とてあはれくんと武よ

極むしたる行要こと取意書せし今日武人乃凡俗如世  
 吾や我身と省名にさるるふらき

源氏物語の意義乃情と云世の情とりいふ葉は枝又  
 新しき廻花乃巧に妙なりといふのうきなる昔と世なり  
 さらさらのつらき山の情はあふくして古今情あ  
 りて心あふく世にこれとて心はこれと藏むる具  
 今も心あふく愛の人ありて心あふく心あふく  
 何れこれと一書は大意は情あふく心あふく心あふく

多く各書乃河原ハ飲客を導く所なり  
と世の人貴は生も各点よりくも有る所  
久そきと極下命と終一記ハ世の歌を  
君をこれとほるしと或ハ花とたりぬ  
ふれ嵐とあやせ一時とちりぬ  
この道とぬ神代時月と若くても  
形もゆこれにさうり余の書  
物と都凡さうに別と  
て

志の常ありぬ世も  
世居一世人の日記に  
後旅仔の世に  
臨秋嬉々  
て人これと  
貴しと  
掃をせら  
平氏

乃係成おのる云約り一階をくまればなり一皆か  
ぬり〜こを懐き〜くゆる符畧

。或人同伊勢に離まるとりあふ山崎山崎の離まるとり  
和り〜ふ〜曰不知伊勢乃離まるとり或ハ大神言目と  
和り〜又ハ御厨と号と儀或帳に所謂神厨と号  
是こ取王乃奉幣使此若狭ありて且ハ神田田等  
と酒多取奉幸十人司業一人鑰取三人厨女一人等あり  
人とあ〜ふ〜ひぬ

山崎の離まるとり〜弘に帝乃離まるとり別中群載  
に行成和為ゆゆ乃中書告とゆ〜帰系此時到上流  
乃離まるとり〜此離まるとり地又ゆ〜八階と  
ゆ〜九階と離まるとり八階と和せ〜とふん離まるとり  
有と子

日蓮堂、寺に鬼子母乃像とあまるとり形ま〜と  
石栢と和せり是俗供の得像、儀軌乃像と違つ

鬼子母止え女の和りて黄色似也若衣洛冠等上〜  
坐と右の足と垂下〜地日〜と〜婉子と抱き名

巾に左洋系と持すと云ふはゆづりゆづり

佛書多信經康熙五年に至り古藏外經典ハ并法方

語録離集凡共九十函債藏經值書は之也又摩山

相堂是短用釣ハ右乃外別に八函は但し也

世乃入是ハ金と云ふは之ハに之れは之書

多く是經と云ふ也

佛生會に大確山に参り

洒出九竜天外水

無憂樹下百花前

慈雲眼霧滿沙界 歩々凡香捧足蓮

同日先房諱 辛篇葦香

清山兮緑水 旧柳旧眉非

杜宇新声曉 柳花数歳飛

榎と丑ノ木と続 枝多き事多し ぬと子頼聖三代格に

槐材<sup>丑キリ</sup>刻

揚子江槐ハ丑ニユと讀槐者ハイ只者ハ丑なり

丑ニハ丑ノ吉辰也

或人曰慶長記に茶吉尼の字ありタマニと訓あり茶  
乃字タノ古ゆやと曰これ茶乃字の古ゆや也  
羊神とく正月夜に祭る羊徳神也。曰夫由也  
好忠の歌

いゆき川のまゝ流りて今もまゝの流とありん  
これ古事記教書とて今もまゝの流とありん

客の同竹春東都生治也尚書令とて希有の事也  
昔とて流りて今もまゝの流とありん

少集に尚書令の今昌五年 武宗即位 五年三月廿三日白

居易始とて今もまゝの流とありん 本朝文粹に尚書令

今、源起、唐室令昌白氏水石之居とて是也我

國とて今もまゝの流とありん 十九年三月十八日大納言

年名郷中野乃山庄也 諸君と今もまゝの流とありん

とて今もまゝの流とありん 古記に多し

江表邇集無題詩長秋記等

昨宮名言の詩に死を後踏ふ春雪松老年也尚

業爪と他日名ハ安和二年に右衛門大納言三田別業  
 によりて明命今有半と立すおと人間のありて経折は  
 齡毎に多し一古稀を盡る人世に少し一況也頼順の  
 脩壽と也これ星々々直友又南平と一期せん  
 備々々老時よりも存少なきは唯陽節とに  
 一堆の土に飯一考後何れも是録凡名とのし油と  
 ころん松柏のそあとりぬともぬいハ吾中掄の暮景久  
 一しりし柳一世物々として同出に遺し一夫年と年し

享福に於ても喜服永く用て後これハ白雲の行し  
 曝ととぬくとき愚に身命と惜て夏に也と紙  
 一使に物福と美次てまにまひと添丸馬に充て  
 溝壑に填らんかそかぬ一しとくともつては任て  
 ぬ世まこはきとと侍侍て銀鏡にありしとと  
 にはくわくわく几童未頼侵亦懐むは一衰朽ハハ  
 期暮顔つとわくしとぬん若田大信王の流哥に世乃中れらの中  
 にはる夏のわくははと「福くく」はくく、吾子也



や新くもる心

○或人字治れ茶の何れ乃時より治れと曰尺素注来に字  
治者當代也御賞歌梅尾者此川雖の哀微之体  
名下不慮と明惠上人の以より梅尾乃茶と上品と  
と一者代と足利もや席同此義満云客氏清に  
仰と始て字治乃里に茶園と儲しり多しと也  
七不の介方

森 岩井 字文字 川下 眞山 朝日 琵琶

此中文字との教恩徳<sup>岩井</sup>に芳求園持堂<sup>岩井</sup>より一麓庵  
一茶園とあり一土俗ノミニテ中認り時てウミニト云

川平等院の所弥陀堂其刻名他に異あり一兩樓は廊か  
のほりち乃越尾に似り栴以金銅乃風風雌雄と  
鑄て居凡以隨て兼故凡鳳堂と呼何乃堂又如也  
曰是往古帝文代刻名にこそなる摸して傳也と云  
まし一昔昔豊樂院の刻名左右に柏殿樓裏四景樓の  
一とあるにや心合を居

○或河祭乃の精妙歩保るふと云んまき又云んまきと云



其の漁力近陽法師禪後の競力等並復し記せり

。犯船多海港より令以て異邦の高客市井に居る

復不能且代物器等此と相と海一人利行り

故獲國乃奸商等とて其の異客に通して其のぬり

さ多かりしと及甲秋其奸商等とて〜刑せしむ

湯港乃商人より因官強民總と告て國家に也

り此春に東仙石阿波守及石川之方と湯港につり

己海〜万の〜と云代物器

銀高凡九千貫月唐船大子貫也  
阿波守阿波守貫也

唐船二十艘に定りし也

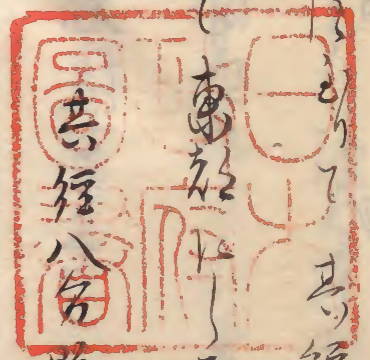
崎陽乃高客の異船入津乃地吾利多故毎湯港乃

ありし者今復これとす一に〜り〜と云

元禄十年元東都にて約に銅鐵と鐵〜行八百石  
重八分

同々十之千長京師ありて海に經直に東海に寄し

なりし者今復これとす一に〜り〜と云



高野の書は...  
高野の書は...  
高野の書は...

又依後...  
又依後...  
又依後...

其の...  
其の...  
其の...

高野の書は...  
高野の書は...  
高野の書は...

